

隆武館空手道の始まり/我生涯武道を志す

S49年教育学部卒伊藤隆司 記

昭和45年4月秋田大学空手道部に入部したのは、現在「相武館」空手道師範石川幸雄先輩（体力と根性が半端無い）の勧誘である。石川先輩とは寮で一緒だったので、忘れもしない4月29日天皇誕生日であった。当時4年生11人（瀬屋主将の迫力が凄かった）、3年生7人（武井先輩の破壊力に驚いた）、2年生8人、新1年生は7～8人、入部していたように思う。いつも30人位は稽古していただろうか。ボロボロの空手着を着せられ、体育館の掃除、正座して五条訓、体操から始まった。体力作りがきつかった。腕立て伏せは一人10回の号令で300回、腹筋も2人1組で足を組み300回であった。何とかやりきったら先輩達から「なかなかやるじゃないか」と煽てられた。基本、移動、約束組手、形三戦（サンチン）を見よう見まねで何とかやった。次の日体は筋肉痛でバラバラだった。この日から地獄の稽古が毎日続いた。平日の稽古は、15時から掃除、15時半～18時半まで稽古、後始末をして帰るのは19時であった。休日の午前中も稽古であった。稽古は黙々と続けられ、気合いだけが道場に響いた。お陰様で体力は十分身に付いた。巻きわら百本突き。百本蹴り。時には小嶺先輩による千本突き、千本蹴りにも及んだ。拳だこもできた（後輩伊藤憲二の拳だこは凄かった）。足底の皮も厚くなった。手形山での四股立ち移動はきつかった。暑い夏でも裸足で熱いアスファルトの道路をランニング（秋田市内の大回り・小回りコース）した。真夏には秋田駅から寒風山までの40kmも走った。寒い冬でも同じように雪道を裸足で（気合いを入れて）ランニングした。雪が降る中、旭川に入って寒稽古もした。

大学卒業後川崎で剛柔流の空手道場を探し、沖縄剛柔流「泉武館」に巡り会うが、通うには遠いため、近所で千唐流の流れを汲む「空手古武道養秀会」に入門し、指導員として修行して師範の免状も頂いた。横浜にある「錬武館道場」からも依頼がありここでも指導した。そして近くの子ども達からの要望もあり、小学校の体育館を借りて、道場生を集めて稽古指導をした。よく試合にも出た。昭和57年全国青少年フルコンタクト大会で、歯を折られながらも準優勝した。平成3年神奈川県教職員大会で、組手の部と形の部でも優勝して、アメリカにも2度程（昭和55年、平成元年）渡航した。日米大会で剛柔の息吹の形シソーチンで優勝し、古武道の部ダブルヌンチャクでは準優勝もした。

秋田大学空手道部の稽古は、全国にもひけをとらない稽古だと認識したのは、昭和54年11月全日本実業団の覇者で、工藤先輩（昭和42年卒）が監督で率いる日産追浜空手道部と、石川先輩（昭和47年卒）、後輩の田中明（昭和54年卒）、伊

藤（昭和49年卒）の3人で交換稽古をしたことです。何と一步も下がらない互角の勝負をしたからです。秋田大学空手道部恐るべし！の反応を得たからです。何とこうした稽古体系を構築したのは、全国の空手道部を訪問し研究した菊地茂先輩（昭和43年卒）ということです。

空手の真髄を追究する先輩達に触発されて、私は1999年（平成11年）6月、自宅に「空手古武道隆武館道場」（30畳の小さな道場です）を開き、現在に至っている。

昨年の12月現役の学生達が活躍する姿（全国国公立大学空手道選手権大会）に感動し、また青春の血が湧き上がってきてしまった。今年の5月神奈川県マスターズ空手大会で27年ぶりに60歳代形の部に出場した。体がぶれて予選敗退だったが、これからが生涯武道の始まりだと自分に言い聞かせた。

私は、怪我（膝、アキレス腱手術、肋骨折）もよくした。2012年（平成24年）齢60にして鍼灸師国家試験に挑戦し、鍼灸ストリーム治療院を開業し、健康道と空手古武道を追究している。（石川先輩を追いかけ続けての48年でもある）

記念写真/隆武館道場生と共に



記念写真/空手古武道七段昇段



秋大空手道部そして相武館空手道へ

S47年教育学部卒石川幸雄 記

「お前、男だろ。」

--そう話されて、稽古場を折り返して移動組手を続ける。そしてもどって来られて--「男だったら、入れよ。」

S43年5月当初のことである。私は秋大空手道部の見学をしていた。空手道部員は稽古場横を使つての移動稽古だ。文頭の会話文は、見学していた私に当時2年生の瀬谷先輩が声をかけてくれたものである。瀬谷先輩は2年生、一斉指導の稽古中なので、話せるのは稽古場の端で折り返す時のみ。このことがきっかけで入部した訳ではないが、私の脳裏にこの時の光景が強く残っている。また同じく一学年上の山内先輩が、ある日の稽古後

「石川来い。」と言われ、太ももの大きさ比べをしてくださり

「石川、俺よりも太いぞ。」と話して下さったことも印象に残っている。

やせっぱの私を氣遣つての行動であることを感じ、すごく嬉しい気持ちになっていた。藤原先輩の綺麗に極まる上段順突き。小松先輩の明るく感じる叱咤激励の大声。三本組手の時、石の如く固い山田先輩の突き、同じく三本組手で必死に向かっている私を見て、よくクスクス笑っていた小玉先輩。私はこの他にも多くの先輩達に厳しくも温かみのある指導で成長できた。大学を卒業したのではなく、4年間耐えて空手道部を卒業したという感じであった。

S47年3月に卒業して、4月から神奈川県相模原市立の小学校教諭になる。同年10月頃に少し心の余裕ができたので、町の空手道場に通り空手を再開した。その空手も組手は寸止めであった。自分の中で寸止空手に「何か足りないものがある?」という気持ちがずっとあった。空手と並行して25歳の時に町田のボクシングジムに通った。28歳から30歳の時は空手を離れてキックボクシングジムで稽古をした。

その後、S55年4月に(31歳)で相武館空手を創設し現在に至っている。創設して3、4年経過した頃、教え子が大会で良い結果を残すようになったこともあり、全空連に加えて大きな流派にも加盟し、万人が認める団体にならなければと考えた。故郷岡先生に連絡をさせていただき、剛柔会関東地区本部長の故田崎先生をご紹介してもらい、剛柔会に加盟した。故郷岡先生には道場の5周年・10周年にご臨席賜った。館員の中には剛柔全国大会・剛柔関東大会、全空連関東大会・神奈川県大会で優勝した者がいる。形では歌川和美、内田宣央、平野学、外村萌夢。組手では岡本裕孝、内田宣央、平野学、岡田幸菜、外村萌夢、堀井明日香、遠山達也。現在の空手界で、大きな大会の試合で

勝つ選手は、小中学生でも週4日位稽古をし、土・日曜日は県を超えて強豪道場同士が交換稽古をしているのが現状である。これは70歳も間近になる私には無理。本館指導員の中にも、そこまで夢中になれる者はいない。本館の道場生は多い者で年8回位の試合をする。稽古内容を試合優先にせざるを得ないことに、ここ数年違和感を持つようになった。形の分解、そしてその分解技の熟達、開手での乱取り、護身術等の稽古時間を確保したいと思うのだが。また、空手の真髄と醍醐味は握った拳ではなく、開手技である「掌底」「指挟」「背刀」「手刀」「孤拳」「彈拳(だけん)」等を使いこなすことと考えている。小4から教えた者達が今は48歳、その中の5名が指導・運営で協力をしてきている。孫弟子も5、6名いる。10年程前から菊地先輩、7年程前からは小松先輩・山田先輩が道場へ足を運んでくださっている。特に小松先輩は週2日来られて、子ども達に指導をしてくださり有り難い限りである。

さて蛇足になりますが、メジャーリーグで活躍している「大谷翔平選手」は私の実家の母体町(もたいまち)から2km弱の距離にある姉妹町(あねたいまち)の出身である。蛇足のついでに、フリーのプロレスラー「石川修司」は私の甥(兄貴の次男)である。

※優勝した館員

- ・複数の大会で優勝した館員がいる。
- ・優勝種目は小学生から成年の部に渡る。

記念写真/第34回相武館大会「黒帯会演武」



北政での空手道指導と普及について

S47 年採鉉学科卒武井全補 記

今から 46 年前、昭和 47 年（1972 年）に渡政し、6 年間に渡り空手道を指導しました。最初スウェーデンのストックホルムでフランス人の道場、南アフリカ人の道場、日本人の道場、続いてフィンランドのマリンハムに渡り、フィンランド人の道場などで稽古がてら指導しました。他の日本人が、スウェーデンのウプサラで合気道を指導していたり、マルメでは剣道をと武道は相当期待されていました。一年近く経って知り合った剣道家の要請で、スウェーデンのマルメに道場を開き、その後デンマークのコペンハーゲンに開き、常に 30 人前後を指導していました。彼等の熱の入れ様は並々ならぬものを感じ取ったので、秋田大学空手道部はプロ並みの稽古をするぞ」と吹聴してきたこともあり、大学時代そのままの気合い、そのままの濃密な稽古を指導したものです。私自身もより鍛錬が必須との思いに駆られ、臍下丹田には確りと氣を入れ、工夫を凝らし全力を傾注する毎日で、二年後には石郷岡師範にお越し頂き道場生と共に稽古をつけて頂きました。空手道といえ、私の思いの中には一撃で倒す技だというのがるので、その武術性と、現在の（50 年前もそうではあったが）スポーツ・ポイント制空手との間に葛藤を生じないわけにはいきません。

しかし、そういう事ではあっても、大学の空手道はスポーツ空手道で良いのではないかと思います。スポーツ空手道に徹して良いとは思いますが、一撃で倒す技の一つは持つべきです。なかんづく、基本とその精神を鍛錬するに越したことはありません。沖縄で発生した空手の起源の事由を慮り、また日本武士道の精神を鑑みると、稽古においても然りで、日常生活においても安閑としてはられません。何とすれば、現今の日本人の威儀、生活感には憂慮せざるを得ない処がある故です。日本の精神文化は東洋哲学の粹を集め、そして昇華されたと言われています。それは何かと言うと、生死を超えた世界、損得、勝敗や美醜や大小などを超えた価値観から物事を見ようという思想です。あらゆる存在、全ての事象は心の様相も含め無限の集合体であるということです。試合の勝負では徹底的に勝ちに拘りながらも、精魂の清徹する処海底深く行くが如く、相手に向き合うのです。勝敗は、真実は何か、古人云わく「虚空に背面無く、鳥道は東西を絶す」と。こういう精神を会得し、稽古に稽古また稽古するということです。かくあるからこそ、かく一大事に臨んで怖いもの無し。癸心百万癸すれば、何事もならざらんや。北政の人達には以上のように空手道と併せ日本の精神文化を伝えて来たと言っています。

とは申せ今までの 30 年間稽古着を着ていない身で、このような事を言うの

も、おこがましいと思う次第です。秋田大空手道部員並びにOB各位には身心堅固を祈念致しております。

記念写真/マルメ道場



空手道と出会えて

S45年機械工学科卒藤原文雄 記

入学時、自分は秋田工業高校卒のため顔見知りの人がおらず、同じ高校卒で唯一の友人と一緒に構内を歩いている時に、菊地先輩に勧誘されたことを思い出します。友人は体育会系の体格を有していましたので、自分は部員勧誘の都合で入部できたと思っています。高校時代は無部でしたので、体力が追いつけず、血尿の連続で、一度退部届を提出したものの、結果的に恥ずかしながら続けた経緯があります。転機は2年の東日本大会（仙台市）後でした。この大会は選手での出場はなかったですが、転身、後の先に興味を持ち、いかにして相手に蹴りを出させ、転身して払って突きを出すかまた相手が技を出す瞬間に相手より先に技を決めるか、一本技を磨いていきました。突きに関しては腕が完全に伸びた瞬間にいかに早く引けるかそればかりを考えていました。

相手が技を始動するとその技を止められません。相手の始動を感知した瞬間に攻撃して、下半身を安定させるのと同時に突いた腕も引き終わり相手より先に技を完遂させて、残心を体現させるといった具合です。後の先を完遂させるには相手の初動を待つ精神力と腹筋を含む下半身の強化が必要です。手形山の稽古、バスの大回り線一周ロードワーク、巻き藁突き等先輩方が完成させた秋田大学空手道部の練習メニューが自分を鍛えてくれたと考えています。

自分は大学4年間は空手に没頭し、卒業後は空手と距離を置くつもりでしたが、入社と同時に石郷岡師範より、監督をやれと言われ、またその年の第一回世界選手権の予選に出ろと言われました。1年間も稽古をしていませんでしたので、代表に選ばれた時は少し驚きましたが、先輩、同輩の方々が参加していれば、相当数、選出されたものと今でも思っています。監督時代は会社からの承認が下りなかったこと、勉強不足で仕事を覚えるのが精一杯であったことなどから、後輩の面倒を力一杯見られなかったことをこの場を借りてお詫び申し上げる次第です。只、秋田大学空手道部に入部し、4年間全うしたお陰で先輩、同輩、後輩と出会うことが出来ました。これは誇りであり、自分の人生で最大の宝物です。

日産自動車空手道部について

S42年機械工学科卒工藤善明 記

昭和42年に日産自動車(株)に入社し直ぐ空手道部の設立を検討した。同じ
追浜地区実験部に自衛隊出身で和道流空手の有段者がいる事を知り、彼と相談
し、鎌倉在住の和道流師範の故蔵並先生に師範をお願いする方向で、部員を募
集した。毎日、仕事が終わってからの稽古に加え、合宿や強化練習を頻繁に行
った。実業団大会で好成績を残せるレベルになったのは、大分出身の故古梶が
キャプテンになった時である。彼は第1回世界大会が日本武道館で開催された
時の全日本の選手に選ばれている。全日本実業団大会では2回、団体組手優勝
を遂げている。又、団体優勝者は故古梶、小倉、横内、瀬戸と4名輩出出来た。
彼等は実業団空手道連盟、神奈川県空手道連盟でそれぞれ役員として活躍して
いる。

新入部員が少なく、かつての様な活動は出来なくなったが、横須賀市大会、神
奈川県大会、実業団大会で現役選手が活躍出来る様、我々OB会員が指導、サ
ポートしている。

かつては会社から、空手道部として費用の援助があったが、現在は一切なくな
り、全て部費で賄っている事が最大の悩みである。

「五条訓」を追浜工場体育館に掲示し、今も残っている事は秋田大学空手道部
OBとしても誇りに思う。